

◎新型コロナウイルス禍で考える日本の行方

◎第43回 レストランで遭遇した出来事から思う

全国日本語学校連合会 研究員 對馬好一

日本列島をサクラ前線が北上するのとともに、令和6年度が始まりました。日本の年度はサクラ咲く4月から翌年3月までです。皆さん、大きな期待を抱いて新しい生活を始めたことと思います。

東京でサクラのつぼみがまだ固かった3月9日土曜日の昼、私はある小さな音楽会に出席するために、神奈川県藤沢市を訪れました。早めに着いたので、JR藤沢駅近くの小さなレストランにふらっと入った時のことです。

予約もなく入った店で店員さんに「いらっしゃいませ」と大歓迎され、席に案内されました。その時、入り口わきの席で、初老の紳士が1人でビーフステーキをおいしそうの食べているのが目の隅に入りました。暖かい春の陽射しに恵まれ、ちょっと贅沢なランチを楽しんでいるのでしょうか。どこのレストランに行ってもそうですが、他のお客さんのプライバシーを侵害してはいけないので、特に注目しないで用意された席に座りました。

注文が終わってしばらくたった時のことです。高いパーテーションで仕切られた向こう側で、「お客様、大丈夫ですか！」との声。引き続き、「テーブルをどけて！」「そこに下向きに！」という女性の声が響き渡りました。私の席からは見えないので、「机の下に何か落したのかな？」「それとも、食事が終わって帰るのに通れないので何かどけるのかな？」などと思いましたが、その声はだんだん大きくなっていきました。

「背骨が折れてもいいからそこをバンバン叩いて！」「〇〇さん、119番。救急車呼んで！」「お父さん！大丈夫ですか！大丈夫だから頑張ってください！」。次々に切迫した声が響いてきます。私もかつては会社の安全管理者として訓練を受けたことがあるので、ここまで来て、「さっきの初老の紳士に何かあったな。何か発作を起こしたかな？」と心配になりました。でも、女性の声でしっかりした指示が響いているので、「邪魔をしてはいけない」と思い、パーテーションの陰で耳をそばだてているだけ。私が注文した料理が運ばれてきましたが、のんびり食べている雰囲気ではありませんでした。

ドン！ ドン！ ドン！ と何かを叩く音が響き、しばらくすると、「あ！ 出た！ 助かった！」「お父さんよく頑張ったね。もう大丈夫！」との声が響くのと同時に、救急隊員が入ってきました。「この方が患者さんですか？ 喉に詰まっていますか？」「はい！ 詰まっていましたが、今出ました。その机の下に転がっている塊かたまりです！」というやり取りが聞こえ、救急隊員が紳士の容体を見る様子。やがて、パーテーションの間隙から見える入り口から担架に乗せて外に運び出し、救急車のサイレンを鳴らして病院に向かったようです。

ウェイトレスやウェーターがかわるがわる私の席に来て「申し訳ありません。お騒がせしました」というので、「いや、素晴らしい救急救命だ。この店ではそういう訓練をやっているのですか？」と聞きました。この店のステーキは1口サイズの切り身ではなく、お客さんが自分で小さく切り分

けて食べるようになっているので、呑み込みが悪いお年寄りなどは喉に詰まらせることがあるかもしれません。

「さっき、指示を出していた女性はどなたですか？ お店の方？」と聞いたところ、「この人です」と連れてこられた人が小柄でシャキシャキしたウェイトレスでした。「貴女がいたからあのお客さんは助かった」と言ったところ、「目を剥いて、顔色が真っ白になっていたの、もうだめかと思いましたが、何とかうまくいきました」と、汗びっしょりでニコニコしています。

私は新聞記者時代、様々な事故や災害現場に行きましたが、これだけ生々しい救命救急現場は経験したことはありません。「あなた方店員さんたちのおかげです。普段どんな訓練をしているのですか」と聞いたところ、「特に訓練はしていませんが、1人でステーキを食べられているお客様は、普段からそれとなく様子を拝見させていただいています」と言います。「それは素晴らしいですね」と褒めると、「実は、私は介護士なのです。訪問介護をしていると、こういうことはよくあります」とケロツとしていました。

騒ぎが収まり、落ち着いた店内で食事をした帰り際、私は、「実は私は元新聞記者です。神奈川県でも仕事をしていました。私が現役なら、今日のことを新聞に書きたいし、紙面に載れば、人命救助であなたは（藤沢）市から表彰されるかもしれません」と話しましたが、彼女は「当たり前のことをただけです。あのお客様は病院に運ばれましたが、多分大丈夫でしょう。よかった」と笑っていました。

話はこれだけですが、私は深く考えざるを得ませんでした。

飲食店では何が起こるかわかりません。ことに、ステーキや餅などを扱っている店では、お客さんが喉に物を詰まらせるなどの事故が、この日のように起こることは否定できません。彼女のような鍛えられた医療従事者が必ず店にいるとは思えないので、業界として、こうしたときに対応できるように店員訓練をすることを義務付けることは必要かもしれません。

その一方で、なぜ、こうした技術や知識を持った介護士が介護施設ではなく、小さなレストランでウェイトレスとして働いているのでしょうか。職業に貴賤はないので、誤解を招かないようにしなければなりません、色々考えてみました。

彼女にはいろいろな事情があるでしょうが、詳しくは聞いてはいません。1人の命が救えたことは素晴らしいのですが、その介護の技術や知識を持った人が現場を捨てて（あるいは抜け出して）飲食の世界で、自分が持っている資格とは関係なく働いている現実は何なのでしょう。今、日本は高齢化が急激に進んでおり、介護職員の不足が叫ばれています。彼女のようなしっかりとした技術や知識を持った人が求められています、その人たちの待遇は決していいとはいえません。資格を持った人が不足しているにもかかわらず、有資格者が介護と直接関係ない雇用環境で働いている現実、待遇の問題が色濃く反映されているのではないのでしょうか。先ほど書いたように、飲食などの現場でもこういう人たちは必要かもしれませんが、一方で、本来こうした技術者が求められている介護現場で慢性的に起きている人手不足の原因と対策を真剣に考える必要があるでしょう。

彼女のようなしっかりとした技術を持っている人に対する介護現場での待遇がそれにふさわし

くないという現実を直視しなければなりません。それが金銭的な面か、労働環境かは詳しく取材してみないとわかりませんが、国家試験を通り、資格を持っている介護・医療従事者が、それだけでは生活していけない現実を直視し、現状にあった労働力の再配置が必要でしょう。

1人の命を救った後、何事もなかったようにさわやかな笑顔を見せてくれたあの場の光景を忘れることはできません。

わが国の介護士や理学療法士などの職場には、外国人留学生のアルバイトや外国人実習生が多いものの、これまで正式な国家資格を取って日本で就職するのは難しかったと聞いています。最近では、外国語でも受験することができるようになったことから、外国人の皆さんにそういう場で活躍していただく道が開け始めました。日本の介護が充実し、外国人の皆さんが手に職を持ち、収入を得ることができるウィン・ウィンの社会を築くことができるでしょう。そして、国籍にかかわらず、そういう方々が飲食業など、人の命に係わる職場の人たちを指導・訓練することで、今回のように死亡事故を防ぐ、安全な社会を構築することができるかもしれません。

大きなビルや公共施設には、AED（体外除細動器）はかなり普及してきましたが。待遇改善により、こうした介護・救急活動のソフトパワー（人的資源）を育成、保護することこそが、安全な市民生活を維持・発展させる原動力ではないでしょうか。そして、万国共通の人材育成ができる分野だと確信しています。